亡き友を偲んで

川瀬　健一

２０１５（平成二七）年４月２２日、午後十時少し前、私の大学以来の親しい友人が奈良県の大学病院にてこの世を去った。吉川裕子嬢。享年６５歳。病名は「多臓器不全」。

彼女は以前から心臓の弁がうまく動かず、おまけに左の肺が繊維化して全く機能せず、右の肺の半分も繊維化して機能しないために、血液を綺麗にして体に酸素を充分に送ることのできない病と闘ってきた。そもそもの原因は、今から４０年ほど前の胸腺ガンの治療のための放射線照射。当時の技術は未熟で、胸腺だけではなく、周辺の大動脈や肺や心臓にまで放射線を照射してしまい、この時の傷が元になって長い期間をかけて左の肺が繊維化。そしてその肺と心臓が癒着して心臓が傾いた結果として弁が二つ動かなくなった。その上に２００５（平成一七）年暮れの伯母たちの看護の無理が祟って右の肺の半分も繊維化。さらに昨年末からしばしば心不全や脳梗塞を起こすので病院で詳しい検査をしたところ、心臓の細胞に血液を送る冠動脈までもが二か所、過去の放射線照射が原因で詰まりかけている事が判明。このため主治医と相談の上で、心臓の僧帽弁置換と三尖弁縫い縮めをすることと、冠動脈のバイパス手術を同時に行って、体全体への酸素供給不足解消を行うことを決意。１月末に大学病院に入院して手術のための検査を受け、２月２日に手術を行う。術後の経過は、医師の話では手術そのものは成功し、一旦は意識も戻って会話も普通にできる状態に戻ったと。３月１６日に大学時代の女友達三人が訪ねた時がもっとも容態がよく、楽しく一時間程度会話（筆談）できた。しかしどうしても胃腸から栄養を吸収することが出来ず、次第に容態が悪化。栄養点滴で辛うじて命を繋ぐも、腎臓の機能も低下して人工透析を行うことに。最後には小腸の内壁からの出血が激しくなったため

人工透析もできなくなり、その結果多臓器不全で死亡したとのこと。

彼女の主治医と直接連絡を取ろうとしたが断られ、彼女の委任後見人となっていた司法書士さんを通じて状況を聞いただけだが、主治医はどうして胃腸が機能しないのかがわからないと首をかしげていたと。しかし以前からメールや電話で状況を聞いていた私には、この手術そのものが無茶だったと思っている。なぜならば以前から彼女は、いくら食べても身にならない悩みを抱えていたからだ。身長１６０㎝余りの上背のある彼女だが、最近は痩せ衰えて骨と皮ばかりとなり、体重は３０kg台に。食欲もなく、何も食べたくないとしばしば訴えていた。心臓や肺に欠陥があって、そのために体への酸素供給が十分でないことがわかったのは、２００６（平成一八）年春のことであった。当時もしばしば心不全をおこして倒れることもあったので、大学時代の友人のＫ君にお願いして、京都の大きな病院の幾つかに当たってもらって検査をし、その中で心臓と肺の欠陥が詳しく判明した。その時の医師の判断は、弁の手術自体は簡単だが肺が機能していないので術後の回復が難しいため、この手術の成功率は５％以下と。だから血液がドロドロにならないように薬で調整して、それでも体調が悪くなったら酸素吸入をして補うしかないとのことだった。そして昨年の春ごろからはすでに夜就寝時だけだったが酸素吸入をして寝るようになっていた。体への酸素補給の不足はすでに十年近い間続いていたのだ。その結果体中の臓器に負担がかかり、胃腸できちんと食物を消化し栄養を吸収できる状態ではなかったのだと思う。今回彼女の手術を執刀した医師たちは心臓外科の医師たちである。果たしてこうした彼女の容態の全てを把握した上での手術であったのだろうか。

１月末に彼女からメールで、手術をするとの連絡があった。この時のやりとりで、今回行う手術が、九年前に想定されていた手術よりもより難しいものであり、さらに当時よりもかなり彼女の体調が悪く、手術そのものに耐えられるのかどうか、そして術後に回復するのかどうかが危ぶまれた。そこでこの点を彼女に問いただしてみた。彼女の返答は、「医師の判断では手術の成功と術後の回復は私の体調如何に掛っている」と。この返答にかなり手術そのものが、一か八かの賭けに近いと感じ、彼女に「成功率が気になるな」とメールを送った。このメールへの返事は、「いつさよならしてもいい覚悟はしておきたい。生還するから、大丈夫よ〃待っててね。」だった。彼女は賭けに出たのではないかとの私の判断は図星だったのだ。これでは私にできることはすでに何もない。「了解。健闘を祈る」。これが、私が生前の彼女に送った最後のメールであった。

吉川裕子嬢との出会いは、１９７０（昭和四五）年の４月。私が大学二年の時。同じ大学の二部に在籍していた彼女が一部に転部し、私のクラスの一員となった時だ。だがこの時は、私は吉川さんには何の関心も示さなかった。なぜなら当時の

私は、最愛の彼女を失って傷心の底に沈んでいたからだ。他の人に気を向けるどころではなかった。この彼女Ｉさんとはとても気が合い、よくお互いのことを話し合っていた。趣味も感覚も良く合っていた。互いにまだ口には出さなかったが、生涯の伴侶にとの気持ちを強く持っていたことは確かだ。だからこそ彼女は、私だけに彼女の出生の秘密を打ち明けてくれた。だがこの秘密を不用意にも、私の友の一人Ｔ君に喋ってしまった。そしてこのあと、この秘密をあちこちに私が言いふらしているとのうわさが流れ、彼女は怒って絶交を突き付けて来た。うわさを流したのはＴ君だった。吉川裕子嬢との出会いは、この直後だった。

　それから一年以上経ったとき、彼女はあのうわさをまき散らした友の彼女だった。彼は私の彼女を奪おうとしてうわさを流して二人の仲をうまく引き裂いたが、おそらくこの裏を彼女に気づかれたのであろう。一時は急接近していた二人は間もなく離れていた。その後彼が如何にして吉川裕子嬢と接近したのかは定かではない。大学時代の私は、大勢の友人と行動を共にすることが多かった。男六・七人と女四・五人のグループ。講義をサボって博物館や美術館巡りをしたり、喫茶店に入り浸っておしゃべりもするグループだった。この中に二人もいた。気が着いたら私から彼女を奪った彼に新しい彼女が出来ていた。そして二人はとても親密にしている。あの時の仕返しとして、今度は私が彼と彼女の仲を裂いて、自分のものにしてやろう。こんな思いがムクムクと湧いてきた。その奪い取ろうと思った彼女が吉川裕子嬢だった。

　奪い取るにはまず彼女をよく知らねばならない。幸い何時も一緒にいるグループの中だから観察するには事欠かない。自分の心の中は押し隠して、ひたすら二人に接近して彼女を観察した。彼女は美人ではないが、ふっくらとしたとても可愛い人だ。そしていろいろなことに夢中になり、夢中になると自分の意見に固執する。意見がぶつかるとさらにムキになる。ムキになって反論してくる彼女はとても可愛い。目がキラキラしている。同じ史学科だから歴史の話もよくしたし、読んだ小説、例えばフランスの反ナチス抵抗文学の一冊の話もよくした。ナチス占領のような事態に遭遇したら、自分たちだったらどうしたかと、小説の登場人物になぞらえて議論した。そうこうしているうちに次第に彼女のことが好きになっていった。本気で奪いとりたいと思うようになり、正面から行くことにした。彼女に彼氏がいることを承知の上でプロポーズした。彼女は困惑していた。そしてこのことを彼氏に話したのだろう。或る時大学に行く途中の歩道橋の上で二人と鉢合わせに。その時に彼の方から私に、「俺の女に手を出すな」と突っかかってきた。「悪いが、頂くよ」と言い返してやった。二人で彼女を挟んで歩道橋の上でしばし睨みあった。しかしここまでだった。この時は二人の仲は壊れなかった。大学四年のとき。１９７２（昭和四七）年の暮れのことだ。

　大学を卒業してしばらくして、一度だけ彼女を呼び出して、再度プロポーズをした。彼女の答えは一言。「それは無理。私

は一人娘であなたは長男。二人の両親四人を面倒みることなどできない話。」と。まことにあっけない失恋。

それからずっと後のこと。１９９２（平成四）年８月１５日。二人とも四十代に入った頃、年に三十回ほど美術展に通っていた頃のことだ。この二年程、仏教に関心を持ち、仏教の原初の姿を追い求めていたので、東京国立博物館の常設展の仏像を見たくなり久しぶりに上野に出向いた。そのときふと、彼女のことが頭を過った。今日は土曜日だから家にいるだろうな。すぐ電話してみた。彼女は家にいた。博物館に仏像を見に来ないかというと、彼女はすぐにやってきた。彼女の家は埼玉県の川口市。上野からは近くだ。二十年ぶりぐらいの再会。彼女はちっとも変っていなかった。でもそれは外見だけ。仏像をじっくり見た後話してみると、彼女は真言宗で得度を受けたとのこと。出来たら修行して仏門に入りたいと。わけを聞いて見ると、お母様をガンで亡くして以来、この気持ちが年々強くなったと。それで第一歩として得度を受けたと。大学時代に彼女の普段の明るさの陰に、すっと時々暗い影が過るのを感じたことがあったが、それはお母さんがらみだったのかと思ったが、この時はさらに深入りすることはしなかった。その後、９月６日に池袋のセゾン美術館での「長安の秘宝展」を一人で見た後また会いたくなり、電話したうえで川口の彼女の自宅にまで押し掛けた。お父さんと三人で食事をして歓談した。話は昔以上によく合った。私自身も古代史や中世史の研究を通じて宗教には大学時代以上に関心が深くなっていたし、仏典もいくつも読んでいた。だから余計に話があったのだと思う。大学時代の想いが蘇ってきた。よし再度アタックしてみようかと思い始めた時、「私の時間を勝手に使わないで。これ以上近づかないこと」という彼女からの手紙が来た。二度目の失恋だった。

そして次に彼女と会う事になったのは、２００６（平成一八）年の１月１４日。京都に住む母の上の兄の一周忌が、京都の松本家の菩提寺・天寧寺で営まれた。吉川裕子嬢のことが気になっていたので、伯父の一周忌の法要にだけ出て、大学時代の友人の具合が悪いので見舞いに行ってくると従妹に告げて法要後の会食は欠席。すぐさま鞍馬口駅に取って返し地下鉄に飛び乗って京都駅に戻り、そのまま近鉄線に飛び乗って高の原駅へ。そこから歩いて十分ほどで彼女の家に。この年の年賀状には、自分の命はもう長くはないから、みんなに会いたいという意味の事が書いてあった。その前年１０月末に貰ったメールには、心臓が不調で肺の半分が機能していないとあったので気になっていたからだ。事前に何の連絡もせずに飛び込んだので、彼女はびっくりしていた。そこには彼女の従姉と父親が同席していたが、挨拶も早々に二人は話に夢中。でも私が彼女の家に居られる時間は三十分程度。意外に元気そうな彼女を見て、彼女の病気のことよりも、大学時代の友人たちの近況などをおしゃべりしているうちに時間オーバー。再び近鉄線に飛び乗って京都駅に戻り、午後４時９分発の新幹線で一路帰宅。これが十数年ぶりの再会。二人

とも五十代後半になっていた。

この年の４月２２日に奈良に大学時代の仲間七人が集まり、会食しながら彼女を激励。そして１０月２８日には東京新宿に再び大学時代の仲間八人が集まり、会食して彼女を激励。彼女を励ますための「囲む会」が出来たからだ。しかしこの２００６（平成一八）年１０月が、私が彼女と会った最後の時となってしまった。彼女の体調はこれ以後しだいに悪化し、東京まで出てくることは難しくなり、一方高齢の母を一人で介助している私は、奈良まで出向くことが次第に難しくなり、これ以後数回開かれた奈良での会合には行かれなかったからだ。

４月に奈良で会った時と１０月に東京で会った時の彼女の写真が手元に残っている。この時にすでに、昔のふっくらとした彼女の姿はなく、かなり痩せ衰えた状態だった。でも、私は彼女の葬儀にも行くことができなかったので、私の心の中に残っている彼女の姿は、最後に会った時の痩せた姿ではなく、１９９２（平成四）年の、そして大学時代のふっくらとした姿で笑っている彼女である。

この２００６（平成一八）年1月の再会以後、毎日のようにメールを交換した時期もあった。いや一日のうちに何度もメールが往復することもあった。私がパソコンを起動したままにし、彼女は携帯電話でチャットのように。これが積もり積もって私の手元には、２００５（平成一七）年の暮れからの九年間余りにわたる、彼女からのメール１６４２通と、私からのメールの控え１７０８通が、パソコンの中に残っている。

このメールのやり取りの中で、彼女が背負ってきたものが見えて来た。それはお父さんの暴力の問題。結婚した当時はとても優しい人だったお父さんが、戦争に行って帰ってきてからは人が変わったようになり、妻に激しく暴力を振るうようになった。拳骨で殴りつけたり、皮のベルトで背中を鞭打つように打ったり。その後彼女が生まれ、彼女が小さい時には彼女の前で暴力を振るうことはなかったが、母の体の傷に気がついた彼女が父親の暴力を止めに入るようになると、父は娘をも殴ったり殴り飛ばしたりするように。彼女が母にお父さんと別れようよと言うと、お前がいるからそれはできないと言われ、父親からは、お前さえいなければ別れていたのに、邪魔だと言われる。こんな状況を彼女はずっと抱えて来たのだと言う。「世間的には仲良し親子に見えるけど、そうじゃないの」とは彼女の弁。

お父さんはどこの戦地に行ったのかを聞くと、中国だと。「ならば中国で無抵抗の女や子供まで殺す羽目になったのだろう。その苦しみに耐えかねて暴力を振るうのではないか。そうした体験の手記は幾つもあるからそれを読んだ上で、お父さんの話を聞いてあげたらどうか。誰にも言えずに苦しんでおられるのだと思う」と彼女に言ったが、「こわくて、それはできない」と。

ようやく彼女の暗い影の原因が見えた。「だから男の人が

信じられないの」と彼女はよく言っていた。そして「こんな父だからこそ、私が最期まで父の面倒をみる。私は娘の義務を果たす」と言っていた。彼女はお母さんがガンになって死んだのも父のせいだと言い張る。でも父を捨てることはできないと。

この話を聞いて良くわかった。自分の体が思うにまかせず、半病人の状態なのに、無理してお父さんの介助に精を出す。お父さんは老いても元気だから使える介護サービスも最小限。彼女も６５歳になっていないから使えない。だから苦しくても日常生活からお父さんの通院から何から何まで、彼女は無理してでもやっていた。昨年５月にはようやく決心がついてお父さんを老人施設に入れたのだが、バスで一時間もかかる施設まで毎日通い、食事の世話から洗濯まで、自分でやっていた。「無理して自分が先に死んだらどうするの。施設にまかせろ」と私がアドバイスしたので、ようやく施設に任せたが。

そのお父さんが昨年８月２８日に急に亡くなった。９６歳。前の日に面会に行った時は少々食欲が減っているだけで元気だったのに、翌朝、施設に出掛けようと準備していたら、急に心臓発作を起こして亡くなったと施設から電話があったそうだ。メールによると彼女は暫く呆けていたそうだ。

お父さんを施設に入れて肩の荷が下りた気がしたのだろうか。お父さんを施設に入れたそのあとのことだ。自分の体調から考えて長くはないかもしれないと考えたのだろう。委任後見人の契約と、死後事務契約、さらに遺産の処分のための遺言状の作成と遺言執行人選定契約を、お父さんのことで世話になったケア・マネージャーさんから紹介された司法書士さんと結んだ。この契約の過程で、契約文書にいろいろ疑問があるし、司法書士さんを信じられないと言ってきて、メールではなく電話で何度となく相談を受けた。そして郵便で送られた契約書案を私が見て、彼女の疑問点に沿ってそれを書きなおして送り返し、それを彼女が見て契約書案を直して、最終契約に至った。最終契約はお父さんが亡くなったあとのことだったが。この司法書士さんは、最後まで彼女の世話を良くしてくれた。会ったことはないが、とても誠実な人だ。

彼女はなかなか人を信頼できない人だった。その生い立ちからしてそうなったのだろう。そして実際、さまざまな場面で信頼した人から裏切られた経験をしていた。

２００５（平成一七）年に川口の家を引き払って、お母さんの実家のある奈良県に移ったのも、彼女自身が職場でひどいいじめにあって鬱病になっていたことと、長年住んできた家の地主さんがいきなりビルを建てるので立ち退けと言ってきて、お父さんを言いくるめてなんら補償金もないまま契約印を押させてしまったからだ。そして移り住んだ奈良で、母の二人の姉が共同生活をしていたのが二人とも病気になっているにもかかわらず伯母たちの身内は何もしないので、彼女一人で伯母たちの入所先の施設を決めて移し、さらに家財や家の処分まで一人で処理。この無理が祟って昏睡して救急車で病院へ。ここで肺が真っ白になっている事が判明。さらに

調べると左の肺が繊維化し、右も半分繊維化し、心臓にも不具合が。さらに２００６（平成一八）年７月２７日に９３歳で亡くなった身寄りのない上の伯母が遺産を彼女に残してくれたが、その遺言執行人の弁護士が悪い人で、手数料を通常の倍以上に吹っかけて来た。これは幸い彼女の東京の知り合いの弁護士が警告してくれて通常の手数料で終わったが、別の知り合いから紹介された弁護士に伯母の関わっていた裁判の事務を代わってもらったが、これもまたこちらが素人だと足元を見て法外な手数料を要求する。こんども大学時代の友人Ｋ君と東京の弁護士さんが入ってくれて弁護士を解任。斯様に次々と人に裏切られている。

こうした背景を考えてみれば、彼女がお父さんを見送った後で一か八かの手術に踏み切った気持ちもわからないではない。人に頼らず自分で生きて行きたかったのだろう。

こんなに遠くにいるのでなければ、最期を看取ってやりたかったと思う。いや、側にいれば、無理な手術をして苦しんで死なすことはなかったと思う。身近に手助けできる人がいれば、介護保険も使いながら、酸素吸入を常時行い、まだ何年かは生きられただろう。

２００６（平成一八）年から２００８（平成二〇）年、病状改善をはかるため幾つもの病院をめぐった時期、私は何度となく、奈良ではなくてもっと医療事情の良い京都へ移れとアドバイスした。そして何度も病院に付き合ってくれたＫ君も同じことをアドバイスし、京都の伏見や宇治あたりに、彼女とお父さんが入れるアパートを幾つも見つけ、ここに移ることを勧めてくれた。ここなら京都府の北に住むＫ君も、近所に娘さんが住んでいることもあって、もっと短い時間で手助けに来られるからだ。しかし彼女は奈良に固執した。また私は、川崎の我が家の近くに来ないかと提案しようかと考えたこともあった。しかし、当時私はある女性に恋をし、付き合って欲しいと申し入れていたので、吉川嬢の面倒をみることには躊躇し、結局提案もしなかったことが悔やまれる。彼女はきっと拒否しただろうが。

本当は、彼女には兄弟姉妹がおらず、その上近しい親族もあてにならないのだから、親しい友人の居る所に住んでいた方が、何かと便利なはずである。長い間住んでいたのは埼玉の川口。そして大学は東京である。また大学卒業後三十年ほど勤めていたところも東京だし、仕事で得た友人も東京付近に多いという。友人がたくさんいるのは、東京と首都圏である。さらに彼女が二十代のガンとの闘病生活以来、もっとも信頼し常に診てもらっていた医師も東京におり、そのうえ知り合いでいろいろ相談し、最後にも世話になった弁護士さんも東京にいた。いくら長年住んだ川口の家を追い出され、自身が鬱状態だったと言っても、奈良に移る必要はなかったのだ。それに川口を出る前に、相談をしてくれたら、良い弁護士を紹介して、地主から慰謝料を取って、東京近辺に家を借りることも可能だったとは、大学時代の友人の一人Ｎ君の弁である。私もそう思う。

なぜ彼女は奈良にこれほどこだわるのか。

これはやはり、亡きお母さんへの想いが強いからだと思う。奈良はお母さんの実家があり、お母さんが娘時代まで過ごした思い出の地だった。母の思い出の地に、あくまでも住みたかったのであろう。

彼女の葬儀は、２０１５（平成二七）年４月２６日、奈良市の葬祭場で行われた。喪主は後見人の司法書士さんが務め、参列者は十三人。彼女のいとこたちと、職場時代の新潟に住む友人が一人、それに大学時代の友人で、お母さんの世話で東京に出てきていた石川県に住むＨさんが急遽参列してくれた。さらに吉川さんのお父さんの世話をしていたケア・マネージャーさんやヘルパーさんや施設の人たち。最後にお世話になった人たちや友人に囲まれて彼女は旅立った。Ｈさんによると、祭壇は花一杯に飾られていたと。おそらく花の大好きな彼女の、生前の希望によるものだろう。死後事務委任状には、葬儀の場所も内容も決められていたのだから。また、術後の経過の中でかなり苦しい思いもしたであろうが、最後に会えたＨさんによると、吉川さんの御顔は穏やかで綺麗だったそうだ。

吉川裕子嬢の遺骨は遺言により、喉仏は母のそれが納めてある高野山奥の院に父のそれと共に納め、あとは大好きな湘南の海に、お父さんの遺骨と共に散骨される。そして彼女が伯母からもらった遺産も含めた彼女の数千万円におよぶ遺産は、「国境なき医師団」に遺贈することになっている。伯母の遺産は元々、重い病気に苦しむ姪へ病気との闘いに使いなさいとの思いやりで残されたものだったが、もったいなくて使えなかった彼女は、これを何か社会に役立てたいと考え、以前から遺贈先を検討し、体調が悪い中でも、奈良県内の老人介護施設や、さまざまな社会団体を見学し、どこが良いか物色していた。その中で以前からその活動に注目し自身も活動を援助していた「国境なき医師団」が選ばれたのだと思う。彼女は３．１１の地震災害と津波災害、そして原発事故のことを、とても気にかけていた。自分の体さえ良ければすぐに支援にも行きたいと思っていると。そしてこの状態にあっても原発再稼働を進め、戦争の出来る国に変えようとする政府に怒りを覚えていた。そんな中、被災地東北にも、そして世界各地の紛争地などで病で苦しんでいる人たちを支援する活動をも行う医師たちの動きに強い関心を持っていたからだ。

彼女の肉体はなくなっても、彼女との思い出の数々は、その親しい友人たちや、体の不調をおしてお父さんの介護に勤しんでいた姿を見ていた人たちの心の中に、彼ら彼女らが健在な限りは、ずっと生き続けるだろう。もちろん私の心の中にも、吉川裕子嬢のことは、かつて二度も生涯の伴侶にと考えた女性として、そしてそれを越えて長い間友人として様々な相談ごとや日常会話に明け暮れた日々とともに、社会問題にも歴史にも共通の関心を持ち、私と同様に花の大好きな素敵な女性として、ずっと生き生きと残っていくことと思う。

（２０１５年６月２２日　記）